

乳児保育の質に関する研究の動向と展望 ー保育者と子どもの関係に焦点を当ててー

東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター (CEDEP)

野澤 祥子

4/20/2016

1. イントロダクション

- 1.1 乳児保育とは
- 1.2 乳児保育の現状
- 1.3 保育の質とは

4/20/2016

1.1 乳児保育とは

- 児童福祉法(第四条第一項): 乳児を「満一歳に満たない者」と定義している。
- 保育現場では、「乳児保育イコール3歳未満児保育」ととらえられてきた(増田, 2009)。
⇒ 本発表でも3歳未満児の保育を乳児保育と呼ぶこととする。

* 英語では、infant care, toddler care, infant/toddler careと呼ばれることが多い。

- 児童福祉施設の設備及び運営に関する基準(昭和23年):

保育士配置基準:

昭和23年(1948年)	昭和44年以降(1969年)
0・1歳 10:1	0歳 3:1 1・2歳 6:1
2歳以上の幼児 30:1	3歳 20:1 4・5歳 30:1

- 多くのOECD諸国で3歳未満児のための保育サービスに対する規制は十分ではなく、無認可の保育施設がほとんど規制を受けずに事業を実施している場合も多い(OECD, 2006)。

4/20/2016

1.2 乳児保育の現状

- 保育所利用率
・3歳未満児の保育所利用率
の伸び(H20: 27.6%→H27: 38.1%)

「保育所関連状況取りまとめ
(平成27年4月1日)」

[http://www.mhlw.go.jp/file/04-](http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11907000-0000098603.pdf)

Houdouhappyou-11907000-

Koyoukintoujoudoukateikyoku-Hoikuka/

0000098603.pdf

(保育所等待機児童数及び保育所等利用率の推移)



4/20/2016

- 待機児童における3歳未満児の割合の高さ(0～2歳児:85.9%, うち1・2歳児は71.8%)

年齢区分別の利用児童数・待機児童数

	27年利用児童	27年待機児童
低年齢児(0～2歳)	920,840人 (38.8%)	19,902人 (85.9%)
うち0歳児	127,562人 (5.4%)	3,266人 (14.1%)
うち1・2歳児	793,278人 (33.4%)	16,636人 (71.8%)
3歳以上児	1,452,774人 (61.2%)	3,265人 (14.1%)
全年齢児計	2,373,614人 (100.0%)	23,167人 (100.0%)

(注)利用児童数は、全体(幼稚園型認定こども園等、地域型保育事業を含む)。

- 子ども・子育て支援新制度:多様な保育形態(小規模保育、家庭的保育、事業所内保育)
...保育士資格者を必ずしも必要とせず、質のばらつきも大きい(藤井, 2015)
- 認可外保育施設(2013年3月31日現在7,939か所 入所児童数:20万3,197人 増加傾向)

4/20/2016

- 保育士の配置基準は定められているが、集団規模に関する規定はない。

図1-3-2 0歳児～2歳児の実員数(保育所・年齢別)



注1) 実員数に記入のあった園のみを分析。

注2) 0歳児では「0人」「1～5人」「16人以上」の3区分に、1歳児と2歳児は「0人」「1～5人」「11～15人」「16人以上」の5区分に、21人以上は「21人以上」の1区分にした。

注3) ()内はサンプル数。

第2回 幼児教育・保育についての基本調査報告書 ベネッセ総合教育研究所
http://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail1.php?id=4053

- 定員超過率は、特に私営では都市部(首都圏・近畿圏)で65.7%、都市部以外でも59.2%。

4/20/2016

- アメリカ小児科学会とアメリカ公衆衛生協会によって推奨されている保育ガイドライン

* 大人と子どもの人数比率	
6か月から1歳半までの子ども	子ども3人に対して保育者1人
1歳半から2歳までの子ども	子ども4人に対して保育者1人
2歳から3歳までの子ども	子ども7人に対して保育者1人
* グループの大きさ	
6か月から1歳半まで	1グループ6人まで
1歳半から2歳まで	1グループ8人まで
2歳から2歳まで	1グループ14人まで
* 保育者のトレーニングと教育レベル	
高卒以上で、その後何らかの専門的教育を受けた者。これには大学での児童発達学、幼児教育学およびそれらの連領域の学位取得者などが含まれる。	

(日本子ども学会, 2013 p22 表2 より野澤作成)

⇒改めて乳児保育の質について検討する必要があるのでは？

4/20/2016

1.3 保育の質とは

○保育の質の諸側面

質の側面	内容
志向性の質	政府や自治体が示す方向性
構造の質	物的・人的環境の全体的な構造
教育の概念と実践	ナショナル・カリキュラム等で示される教育(保育)の概念や実践
相互作用あるいはプロセスの質	保育者と子どもたち、子どもたち同士、保育者同士の関係性(相互作用)
実施運営の質	現場のニーズへの対応、質の向上、効果的なチーム形成等のための運営
子どもの成果の質あるいはパフォーマンスの基準	現在の、そして未来の子どもたちの幸せ(well-being)につながる成果

淀川・秋田(2016)がOECD(2006)をもとに作成した表(p.85)より

4/20/2016

2. 保育者と子どもの関係に関する研究

- 2.1 リサーチ・クエスチョン
- 2.2 発達における保育者と子どもの関係の重要性
- 2.3 集団的敏感性
- 2.4 集団レベルで保育者と子どものかかわりを評価する尺度
- 2.5 日本における乳児保育の質に関する研究

4/20/2016

2.1 リサーチ・クエスチョン

- 乳児保育では、対象となる年齢時期の発達の特徴から、個別的で丁寧なかかわりを通じて、安定した関係性を築くことが必要とされる。
- しかし、複数の子どもが存在する集団の中で、こうしたかかわりには難しさが伴うのではないか。

古賀(2011):1歳児保育担当経験保育士(12名)へのインタビュー

「1:6の難しさ」 目がゆきとどかない、厳しい 8名(66.7%)

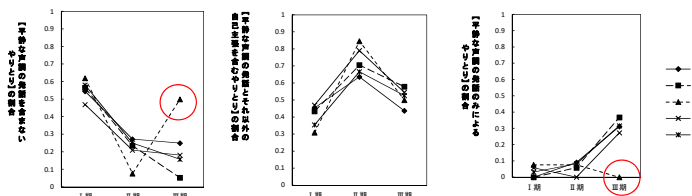
「保育士不足感」 保育士の手が足りない 11名(91.7%)

「保育不全感」 保育実践が不十分である 12名(100.0%)

⇒丁寧な関わりを志向しつつも実現困難な状況に葛藤

4/20/2016

- 自身の研究から:子ども同士の自己主張の発達過程に関する研究(野澤,2013)
- ・保育所1歳児クラスにおいて約1年間の縦断的観察を実施
- ・10名のうち、誕生月が前半の5名(男児2名, 女児3名)
- ・自己主張を含むやりとりを3つのタイプに分類し、I～Ⅲ期の発達パターンを描出



- ・C児は、他の子どもと異なる発達パターンを示した。Ⅲ期になっておんぶや抱っこをせがむなど保育者に甘えるようになり、他の子どもとのかかわりが減少したためである。
- ・保育者によると、それまでは他の子どもに「遠慮していた」

4/20/2016

- 乳児保育においては、個別的で丁寧なかかわりにより保育者—子ども間の安定した関係性を築くことが重要である。

- しかし、実際には、特に1歳児に関しては、子ども6人に対して保育士1人という基準がある中で、個々の子どもとの丁寧なかかわりにより関係性を築いていくことに難しさを感じている場合もある。

- また、ある子どもと保育者の関係は、他の子どもと保育者の関係に影響を受ける。子どもが他の子どもに「遠慮」したり、「嫉妬」したりすることが生じうる。すべての子どもと安定した関係を築くためには、子ども同士の影響関係を把握した上で、表面上の行動だけでなく子どものニーズに敏感に応答する必要があるのではないか。

⇒

- ◎複数の子どもが存在する集団において、個別的に丁寧にかかわることの困難、関係性のダイナミクスに配慮しながら個々の子どもと安定した関係性を築くことに伴う難しさや、それを実現するための専門的スキルについて、これまでどのようなことが明らかになってきているのだろうか？

4/20/2016

2.2 発達における保育者と子どもの関係の重要性

- 乳児期・toddler期の保育者と子どものかかわりの質は、認知的・社会情緒の発達に貢献し、長期的な影響を及ぼす可能性も示されている。

例えば、Vandell et al. (2010)

- ・保育の質と15歳時点での精神機能との関連を検討 (N=1,364)。
- ・保育の質: ORCE (Observational Record of the Caregiving Environment) 6、15、24、36、54か月時に実施。子どもごとに平均値を算出。

* ORCE:

6、15、24ヶ月・・・不快でないシグナルへの敏感性、認知的発達の促進、ポジティブ視線、情緒的分離(反転)、感情の平板性(反転)
 36ヶ月・・・(上記に加えて)探求、浸入性(反転)
 54ヶ月・・・敏感性と応答性、認知発達の促進、浸入性(反転)、分離(反転)

→ORCEが高いほど、15歳時点での認知・学業達成の得点が高く、外在化問題行動(他者を叩く、学校での反抗など)の得点が低い。

4/20/2016

- 保育者と子どもとの関係性に関しては、アタッチメントの観点から研究されている。
- 低年齢児期の保育者との関係が、その後の保育者・教師との関係に、同一人物ではないにもかかわらず、影響を及ぼす可能性が示されている。

・例えば、Howes et al. (1998)

9歳時点での教師に対する認知に以下の要因が貢献するか？

- ・toddler期の保育者とのアタッチメント
- ・preschoolの保育者とのアタッチメント
- ・母親とのアタッチメントの歴史
- ・preschool期のアタッチメントネットワーク

→toddler期の保育者とのアタッチメントの質のみが有意な貢献

⇒乳児保育における保育者のポジティブなかかわりや、保育者と子どもの関係性が、子どもの発達にとって長期的にも重要な意味を持つ可能性が示唆されている。

4/20/2016

2.3 集団的敏感性

- 親が子どもを養育する状況と保育者が子どもを養育する状況は同じではない。複数の大人が複数の子どもを保育するという現実を考慮しなければならない(Mortensen & Barnett, 2015)。
- 保育状況における保育者のかかわりの質に関して、「二者関係の敏感性(dyadic-level sensitivity)」だけでなく、「集団的敏感性(group-level sensitivity)」の重要性が指摘されている(Ahnert et al., 2006; 遠藤, 2016)。

二者関係の敏感性(dyadic-level sensitivity)	一対一のかかわりの中で、個人のニーズに対し迅速で適切な応答を提供する。
集団的敏感性(group-level sensitivity)	集団全体に目を配りながら、子どもの個別性に敏感に応答し、ニーズに注意を払う。子どもの行動を適切に制限したり、環境を構造化する。

4/20/2016

Ahnert et al. (2006)

・子どもと保育者のアタッチメントに関する研究で用いられている尺度を、二者関係の敏感性に関するものと、集団的敏感性に関するものに分類。

・メタ分析により、子どもと保育者のアタッチメントの安定性と、二種の保育者の敏感性との関連を検討。

・その結果、集団的敏感性がアタッチメントの安定性と有意に関連していた。

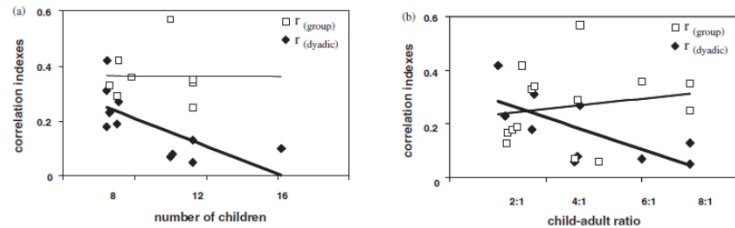
アタッチメントとの関連

変数	
二者関係の敏感性	
集団的敏感性***	
子どもの年齢***	
子どものジェンダー***	
親のSES**	*p<.05
入園時の年齢	**p<.01
入園からの経過時間*	***p<.001

Ahnert et al. (2006)の表より野澤作成

4/20/2016

・さらに、グループサイズおよび子どもと大人の比率との関連を検討。



・集团的敏感性和アタッチメントとの関連は、グループサイズや子どもと大人の比率によって、あまり変化しない。

* ただしグループサイズはせいぜい12。子どもの年齢は12か月～48か月。

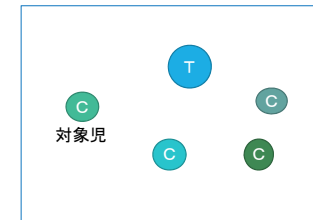
⇒集団に目を配りながら個別の子どもに敏感にかかわるという、保育者の専門性が重要であることが示唆されている。

4/20/2016

●グループにおける保育者と子どものかかわりと年齢との関連 (Gevers Deynoot-Schaub & Riksen-Walraven, 2008)

・子どもが15か月時と23ヶ月時に、家庭と保育所において観察。

・保育所では、主担任と同年齢で同じクラスの他の子ども3人とともに構造化されたプレイセッションを実施。



4/20/2016

・保育者／親と子どものかかわりについて以下の内容をコーディング。

(1)Supportive presence	安全基地となり、情緒的サポートと必要な励ましを提供する
(2)Respect for autonomy	子どもの個性、動機、視点を認め、押し付けがましくない
(3)Structure and limits	子どもが課題に成功するよう構造と制限を、柔軟にタイミングよく提供する
(4)Quality of instruction	指示をタイミングよく、明確に、理解できる速さで段階的に提供する
(5)Hostility	子どもに怒りを表出したり、子どもを拒否する

・子どもの年齢(15か月,N=69と23か月,N=70)による保育者の行動の違いを検討した。

・15か月時と比較して23か月時の方が、保育者のポジティブな行動の得点が高く、ネガティブな行動の得点が高い。2時点でも保育者が同じ場合も違う場合もその傾向は同じ。

4/20/2016

・ Supportive presenceのポイント(7ポイント中)について、3点以下(不十分なレベル)および6点以上(非常に高いレベル)の割合を、年齢と、保育者／親により比較した。

	保育者	親
15か月時		
3(不十分なレベル)以下	42%	11.6%
6(非常に高いレベル)以上	24.6%	33.3%
23か月時		
3(不十分なレベル)以下	14.7%	17.1%
6(非常に高いレベル)以上	36.8%	38.6%

Deynoot-Schaub & Riksen-Walraven(2008)の本文より野澤作成

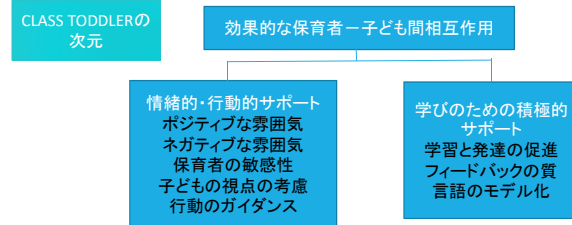
⇒特に1歳前半の複数の子どもに対するかかわりは容易ではなく、この年齢におけるグループ保育がよいのかを再考する必要があることを示唆している。ただし、高いレベルを示す保育者も存在する。保育者への教育によりかかわりの質を向上することができる可能性も示されている。

4/20/2016

2.4 集団レベルで保育者と子どものかかわりを評価する尺度

- 近年、保育者と子どものかかわりの質の向上を目指し、それを評価する尺度や研修プログラムが開発されている。

➤CLASS TODDLER (La Paro et al., 2012) : おおむね15-36か月児向け



4/20/2016

CLASS TODDLERの項目例

保育者の敏感性: 子どもたちの個人的なニーズと情緒機能への応答性と気づき。安全基地としての利用可能性の程度を含む。

気づき (Awareness)

- ・クラス全体の子どもたちに注意を向けている
- ・困難や、困っている子どもに気づいている

Low (1,2)	Mid (3,4,5)	High (6,7)
保育者は子どもの合図をモニターしていない／子どもたちがさらに援助や助けが必要なときに気づかない状態が継続する。	保育者はときどき子どもたちの合図に注意を向ける。ときどき子どもの困難やニーズに気づかない。異なる活動や時間帯にはもっと子どもに注意を向けているかもしれない。	保育者は常に子どもたちに注意を向けており、合図に気づき、子どもに困ったことやニーズがあるときには気づいている。

* ただし、クラス全体について評定するため、個々の子どもの経験を評価できていない可能性には注意が必要。

4/20/2016

CLASSの展開例 (Early et al., 2014)

・ジョージア州において、Pre-Kの保育者を対象に、CLASSを用いてTeachstoneが提供する保育者の専門的発達モデルの効果を検討。

◆ Making the Most of Classroom Interactions (MMCI) : 保育者がグループで、定期的に、訓練されたインストラクターとの会に参加し、教室内での効果的な相互作用の分析や、子どもの学びを向上させるために意図的に相互作用する方法について議論する。オンラインのビデオクリップにアクセスできる。特定のビデオクリップを見たり、教室で実践するという課題も出される。

◆ MyTeachingPartnerTM (MTP) : 一対一の遠隔地でのコーチングモデル。オンラインのビデオクリップにアクセスできる。

→ 両方のプログラムの参加者が、CLASS尺度において何らかの向上を示したが、MMCIの方が向上の度合いが大きかった。

参考: CLASSに関するウェブサイト Teachstone (<http://teachstone.com/>)

4/20/2016

➤ CIP (Helmerhorst et al., 2014) : 0~4歳児向け

オランダの保育における保育者と子どものかかわりの質をとらえる尺度として開発

* オランダでは、1995年からITERS-R/ECERS-Rで保育の質を評価。

7ポイント中 1995年: 4.5 → 2005年: 3.2

スキル	内容
敏感な応答性	個別のニーズに気づき、適切かつ迅速に応答する
自律性の尊重	子どもの意図や視点の妥当性を尊重する
言語的コミュニケーション	言語的やりとりの質と頻度
発達の刺激	子どもの発達を促そうとする意図的試み
ポジティブな子ども同士の相互作用の促進	子ども同士のやりとりの指導

→ これらの尺度は、集団レベルでの保育者の敏感性について行動レベルで明確に示す。また、保育の質のモニタリングとともに、保育者の研修プログラムへの展開が考えられている。

※ただし、保育についての考え方や保育のあり方は文化によって違いがあり、文化感受性の高い質の基準を開発する必要がある (e.g., van Schaik et al., 2014)。

4/20/2016

2.5 日本における乳児保育の質に関する研究

- 日本における保育の質に関する研究には、金田ほか(2000)によるものがある。
 - ・保育者は「よい保育」のイメージを自分と子どもとのかかわりのなかに見いだす傾向が強い。
- 保育者の自由記述から抽出された子どもとのかかわりに関連するカテゴリー
(1993年実施。約100名の保育者対象)

カテゴリー	記述例
子ども中心の保育	子どもの立場に立って 子どもの主体を大切に
子どもを受容する保育	子ども一人ひとりに寄り添う あたたかく受容する
子どもに共感する保育	共感しあう、気持ちが合う、一体になれる
子どもが意欲的になる保育	いきいきする、意欲的にあそべる、自分を出せる

⇒実際には、集団の中で個々の子どもとどのようにかかわっているのだろうか？

4/20/2016

□2か園における抱きの姿に関する観察(抜粋)

I園:小規模園、0～1歳児混合クラス計12名
保育者3名、パート1名

A園:大規模園、1歳児クラス16名
保育者5名

子どもの求めにただちに抱きで応じる
長時間抱いてかかわる
外界に目を向けるような働きかけ
はあまりない
子どもの興味に1対1で徹底して対応
子どもが自ら離れていくことで区切り
をつける

子どもがぐずったり泣いたりしている
時でも、言葉かけや部分的な身体接
触などをし、ただちに抱かない時も
保育者が子ども集団のなかに遊具を
もちこみ、子どもたちの参加や活動の
状況に合わせて遊具を補ったり場を
分けたりし、複数の保育者が役割分
担して対応

緊密な二者関係の形成を重視

まわりの世界に働きかけていく
活動意欲の育ちを重視

4/20/2016

●かかえこみの「受容」と開かれた「受容」

・かかえこみの「受容」:

「子どもの思いや意図を探り追いかけるだけでは保育者はいきづまるか振り回されてしまうことになりかねない」「大人との情緒的一体感のみを重視する「受容」は、「かかえこみの保育となってしまう」

・開かれた「受容」:

「ありのままを受けとめつつ、子どもの意図(思い・要求)をさぐり、それを育てる手がかりを与え、子ども自らが選択し意図したことを実現していくといった次の見通しを生み出す」

「保育者との関係だけでなく他児や事物・事象など周辺世界への広がりをとらえる視点が不可欠であり、それらを媒介として活動意欲を生み出す方法を保育者と子どもの共同作業で進めていくことが重要である」

⇒子どもと大人の二者関係に没入することで他の子どもを見失うことのないようにするというだけでなく、周囲の世界に開かれていることがそのときにかかわっている子どもの発達にとっても重要である可能性が示唆される。

4/20/2016

3. まとめと今後の研究の課題

◎複数の子どもが存在する集団において、個別的に丁寧にかかわることの困難、関係性のダイナミクスに配慮しながら個々の子どもと安定した関係性を築くことに伴う難しさや、それを実現するための専門的スキルについて、これまでにどのようなことが明らかになってきているのだろうか？

- 集団的敏感性(集団において個別の子どもに敏感に応答する)の重要性の指摘(Ahnert, et. Al., 2006)
- 特に低年齢の場合、集団において個別の子どもの安全基地となり情緒的サポートをすることの難しさが示される一方で、それが全く不可能ではなく、専門的スキルとして向上させることができる可能性(Gevers Deynoot-Schaub & Riksen-Walraven, 2008)
- 集団レベルでの敏感性を含む尺度が開発されており、必要なスキルを行動レベルで明確に示すとともに、保育者のスキル向上に貢献する可能性(e.g., La Paro et al., 2012)
- 二者間に閉ざされた「かかえこみ」の受容ではなく、周囲の世界に「開かれた受容」が子どもの発達にとって重要である可能性(金田ほか, 2000)

4/20/2016

<今後の研究の課題>

□尺度を用いて保育者と子どものかかわりの質の評価・向上を目指す。

適切な大人と子どもの比率やグループサイズの検討

国際比較

□集団における保育者と子どものかかわりの内実をより詳細に検討する。

たとえば、Gevers Deynoot-Schaub & Riksen-Walraven (2008)において、質の高いかかわりをする保育者と不十分なかかわりの保育者の違いはどこからくるのかは明らかになっていない。

□個々の保育者のスキルだけでなく、構造の質(保育環境や人員配置)、保育者同士の連携のあり方等の要因との関連を詳細に検討する。

4/20/2016

<引用文献>

Ahnert, L. Pinquart, M., & Lamb, M.E. (2006). Security of children's relationships with nonparental care providers: A meta-analysis. *Child Development*, 74, 664-679.

Early, D.M., Maxwell, K.L., Skinner, D., Kraus, S., Hume, K., & Pan, Y. (2014). Georgea's Pre-K professional development evaluation: Final report . <http://dec.al.ga.gov/bfts/EvaluationGAPreKProfDev.aspx>

遠藤利彦 (2016). 「子どもの社会性発達と子育て・保育の役割」 秋田喜代美(監修)『あらゆる学問はほいにつながる:発達保育実践政策学の挑戦』 東京大学出版会.

藤井伸生 (2015). 「新制度の多様な実態:地域型保育(家庭的・小規模・事業所内・居宅訪問型保育)」 全国保育団体連絡会・保育研究所(編)『保育白書2015』 ひとなる書房.

Gevers Deynoot-Schaub, M. J. J. M., & Riksen-Walraven, J.M. (2008). Infants in group care: Their interactions with professional caregivers and parents across the second year of life. *Infant Behavior & Development*, 31, 181-189.

Howes, C., Hamilton, C., & Philipsen, L.C. (1998). Stability and continuity of child-caregiver and child-peer relationships. *Child Development*, 69, 418-426.

4/20/2016

Helmerhorst, K.O., Riksen-Walraven, M., Vermeer, H., Fukkink, R.G., & Tavechino, L.W. (2014). Measuring the interactive skills of caregiver in child care centers: Development and validation of the caregiver interaction profile scales. *Early Education and Development*, 25, 770-790.

金田利子・諏訪きぬ・土方弘子(編著) (2000). 『保育の質の探求:「保育者—子ども関係」を基軸として』 ミネルヴァ書房.

古賀松香(2011). 1歳児保育の難しさとは何か. *保育学研究*, 49, 248-259.

La Paro., Hamre, B.K., & Pianta, R.C. (2012). Classroom assessment scoring system(CLASS) manual, toddler. Versa Press, Illinois.

増田まゆみ(編著) (2009). 『乳児保育』 北大路書房.

日本子ども学会(編)菅原ますみ・松本聡子(訳) (2013). 『保育の質と子どもの発達:アメリカ国立小児保健・人間発達研究所の長期追跡研究から』 赤ちゃん和妈妈社

野澤祥子(2013). 歩行開始期の仲間同士における主観的やりとりの発達過程:保育所1歳児クラスにおける縦断的観察による検討. *発達心理学研究*, 24, 139-149.

OECD (2006). Starting Strong II: Early Childhood Education and Care, OECD Publishing. (OECD 編著、星三和子・首藤美香子・大和洋子・一見真理子訳『OECD保育白書—人生の始まりこそ力強く:乳幼児期の教育とケア(ECEC)の国際比較』 明石書店.

4/20/2016

Vandel, D.L., Belsky, J., Burchinal, M., Steinberg, L., Vandergrift, N., & NICHD ECCRN (2010). Do effects of early child care extend to Age 15 years? Results from the NICHD study of early childcare and youth development. *Child Development*, 81, 737-756.

van Schaik, S.D.M., Leseman, P.P.M., & Huijbregts, S.K. (2014). Cultural diversity in teachers' group-centered beliefs and practices in early childcare. *Early Childhood Research Quarterly*, 29, 369-377.

淀川裕美・秋田喜代美(2015). 「代表的な保育の質評価スケールの紹介と整理」 イラム・シリーズ、デニス・キングストン、エドワード・メルウィッシュ(著) 秋田喜代美・淀川裕美(訳)『「保育プロセスの質」評価スケール:乳幼児期の「ともに考え、深めつづけること」と「情緒的な安定・安心」を捉えるために』 明石書店.

4/20/2016